
デスティニー・ライフ

蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デステイニー・ライフ

【Nコード】

N1880Y

【作者名】

蜜柑

【あらすじ】

一匹の吸血鬼と一人の巫女。そして夢人

三つの出会いにより俺（主人公）の人生は一変した
バトル系ホラー（？）物語。

第一章 ー平凡サヨナラー

紹介&プロローグ（前書き）

どうも蜜柑です

二つ目の作品を書きました

ファンタジーも少し費やしました

そして、多分ペルソナ要素と化物語全開でいくと思います。すみません

紹介&プロローグ

それは、地球と似て非なる星。惑星名は『ライフ』

4つの小惑星に囲まれた惑星。地球の倍の大きさである

その世界には、『人類』『魔法人類』の二つの種族が共に共存をしている。

『人類』：全てが平均的な種族。世界人口の10分の4は人類である。

『魔法人類』：超人類と同じく人類似だが、通常式魔術や科学式魔術などを扱っている種族。

物語

全ての種族が共存する、まさに世界の中心のような超特大都市
都市名：レインボー・ライフ・シティ

ある都合でそこに引越してきた主人公
今年に全類制の学園。中層階の碧最学園に入ることになった高2年生である

変わり映えのない日常がまた過ぎると思っていた主人公
しかし、彼の運命は、その日を境に大きく動き出すのだった

プロローグ

最近、ここレインボー・ライフ・シティには奇妙な噂が流れていた。

「さうて今夜のラジオも、そ・ろ・そ・ろ終わりが近づいてきましたねー」

「えええ。もうそんな時間なんですか？」

放送局から発せられる電波を受信しているラジオ、小さな部屋にそのラジオ番組の司会者の声が小さく響き渡る。

部屋の風景は、今の時代に合わない古風な感じの部屋。部屋に置いてある家具を退かし、大人が5、6人ほど入ったら部屋がだいたい埋まってしまうほどの大きさ。

そんな部屋に一人、少女が横になりながら暇そうにラジオを聞いていた

「それでは最後に、前回言った、このラジオでの新コーナーをやりたいと思います！す！」

「来ましたー！それで、どんな内容のなんですか？私教えてもらってないんですよ」

「では、紹介させてもらいます！…今回の新コーナーは、ズバリ！『都市噂』！」

「都市噂？それって何なんですか？」

ラジオでの司会者達の会話を聞き少女は溜息をつき、ラジオと反対方向に寝返った。

また調子付いたプロデューサが、くだらなさそうなコーナーを作り出したなと思い、少女は次回から違う番組を聞くことを誓った。

「その名の通りこの都市での噂ですよ」

「この都市の噂？」

「その通り！何せここは世界一の大都市！奇妙な噂が1つや2つ……なんてもんじゃありませんよ！もう、わんさか有るに決まっています！」

「そうなんですか？でも具体的に何を話すんですか？」

「まあ、手始めに最近巷で噂の『吸血鬼』について話しましょうか！」

「いや……それって怪談話なんじゃ？……」

「細かい事は気にしない方がいいですよ！」

『吸血鬼』暇そうにしていた少女はその単語を聞き、微かに身じろぎをし、首を横に向け目だけをラジオに向けた

「で、どんな噂なんですか？」

「はい、実はですね。ここ最近暗い夜道で、『吸血鬼』を見た……！つて人が増えて要るんですよ」

「はあ……吸血鬼ねえ……」

「信じてませんか？でも、始めだからマジな話ですよ！」

「後々の話は、全部ウソみたいな言い方ですね」

「と、兎も角！皆さん夜道は気おつけて下さいねー」

「あ、なに無理やり終わらせようとしてい」

「また次回よろしく……！」

カチッ

と、ラジオの電源を止めた少女はどこか深刻な顔つきになっており、一言呟いた

「吸血鬼……か……」

紹介&プロローグ（後書き）

『超能力学園』の続きは大体出来上がっていますが、少し変になっていたので直しています。空き時間に書いているので、少しずつしかできません。本当にすみません

今回のこれは、『超能力学園』で書くのは無理と思って新しく作りました

こちら、多分不定期になると思いますが面白くなるように書いていくのでよろしく願います

おめでとーございます!! (前書き)

どうも蜜柑です

紹介の方を少し変更しました。すみません。

キャラ名も変更します。

ただし、戦場^{いくさば} 紫音と、アリス・フランクールだけはかえません。
地味にお気に入りの名前です

名前のセンスは無いかもですけど、個人的に好きです!

おめでとーっざいます!!

真っ暗な世界

何も見えない。上も下も右も左も何も無い。
意味が有るのかさえもわからない世界

「（嫌いな世界だ…）」

ただ、このまま無駄な時間が過ぎるの。自分の存在も消えてしまい、
全てが消えてしまいそんな世界

「（こんな世界は…みとめたくない…）」

しかし、抗えない。どんなに抗おうとも何かに押さえつけられてしま
う

そして、完全に体の感覚が無くなり全てが溶けてなくなる

まさにその瞬間だった。

まるで、バックライトを浴びせられたかのような感じでそいつは突然目の前に現れた

この場にとっても合わない陽気で明るい声まるで、商店街でよく見るくじの抽選器当たったかのような声。

「おめでとーございます！！。貴方は、*****に選ばれました
！！！！」

思考が追いつかないとは、まさにこの事だ。何が起きたかもわからない。それに謎の人物が言った、ある言葉がよく聞こえなかった。しかし、さっきまで感じていた嫌な感覚が無くなり体が軽くなったのを感じた。

が、そんなことは気に入らなかった。
今の状況を一生懸命に把握しようとするが、そんなの御構い無しにその人物は一方的に話しかけてきた

「貴方は、これから訪れる災厄や謎ひいてはそれを解決する！……
そっという定めにあるようです。はい」

思考はまだ追いつかないが、疑問は抱けるくらいに回復していた

「な……んで」

謎の人物は問いには答えなかった

「私は、貴方の行く末を最後まで見届けなければなりません！それがどんな結果であれでもです！……そういう訳ですので、頑張ってください」

言うだけ言つとその人物はこの場から立ち去ろうとしていた

「ま……待てよ……！」

その人物は止まった。

しかし、それは言われたからではない

「ああ、そうそう！忘れるところでした！事件・謎・災厄その解決の為の最も重要な事の一つ！それは！……《力》です」

そう言つて、コンパスを、そつと横に置いた。

何故かそのコンパスだけは、はつきりと見えたのだ

「その使い方は貴方自身で決めて下さい。どう使おうかは貴方の勝手です……」

そいつは体勢を曲げ耳元でそう呟いた後元の体勢に戻り、続けた

「さて、私から出来るのはここまで。……後は貴方次第です」

顔は確認できなかった。目が光に慣れてないのか、陰で隠れて見えないのか、はたまたこいつには顔が無いのかそれすらも分からない

「貴方は決めなければなりません……。それがどんな結果であれ受

け入れて下さい……」

「“ 始まりの謎 ” を解いた際、 また訪れます。 …… それでは！ 御機嫌よう！」

そう最後に言い残しその謎の人物は消えてしまった

物事が落着いたかのような安堵

そして、同時に眠気が襲ってきた

「（ひどく眠い……）」

そう思って目を閉じた

．．お．．．ま．．．つ．．．し．．．！

（？）

意識が薄れる中、 何かが聞こえてきた

．．お．．．く．．．さま！．．．つ．．．まし．．．！

次第にその声は鮮明にそして大きな声で聞こえてきた

中層階 船着き場 船内

「お客様！着きましたよ！起きて下さい！」

耳に響くような声。真は驚いた

「え…あ！は、はい！」

「もう着きましたよ。降りて下さい」

「あ、はい。どうもすみません…」

キャビンアテンダントの女性は、「全くよ」と言わんばかりの顔をしていた。

即座にその場を離れ船を出た。

中層階 第一地区 船着き場 中層階港通路

「寝ちゃったのか……」

夢の事を思い出そうとするが、どうもうまく思い出せない。
考えるのも面倒と思ったのか、考えるのをやめ、思考を別の方に持
っていった

「ここがレインボー・ライフ・シティ。世界の大都会……」

此処からでも十分に下層階の明かりがとても綺麗に見る

「今日からここで……」

おめでとーございます!!（後書き）

どうも蜜柑です

これは個人的に好きな物をそのまま書いた感じですが楽しんで頂けたら幸いです。

文中に出てきた『船』は中型未来飛行機また未来飛行船の様なイメージです。

中層階 第8地区 男子学生寮

中層階 第8地区 男子学生寮

コツコツと深夜の静寂な道に足音が鳴り響き、ある所で止まった

「ここか」

港から空中歩道で歩き20分、そこからターミナルの電車で10分、最後にバスで10分で着いた場所。

再び青年は手に持っている地図を確認しながら、目の前にあるやらと大きな建物を見上げ、建物の中心部分に在る大時計に目をやった

「もうこんな時間か」

大時計の針は1時を丁度回ったところだった。

寮の扉に近づき、制服のポケットに入っていた学生証カードキーを扉の隣にある機器にカードをスラッシュした。

ピピッと云う機械音と共にロックが解除された

「（オーバーだな此処のシステム）」

寮内 1階渡り廊下

呆れながら中に入り、一本しかない通路を進んでいった。そして今度は作りが豪華な扉が目の前に現れた。此処で行き止まりのようなのでその扉を開け中に入る

「おわゝ、なんだこれ」

寮内 中央部 大図書館広間

部屋の中は六角形状の見たことも無い大図書館の様な大広間にだった
辺りは本棚で埋め尽くされていて、その本棚は大広間の天井まで届
いているようだ。

上を見上げてみれば本が本棚から本棚へと移り変わっている

唯一本が置かれてない場所と言えば、五角形の五つの角の部分一つ
一つにある階段だ。

どこかの部屋に続いているのだろうか階段の上には扉が有りその一
つ一つに番号が大きく浮かび上がってた

「ん？なんだ…誰かいる」

辺りを見渡し、中央に大きな円形テーブルの所に目をやった時に気
づいた

ローブを着ていて、本を枕代わりにし、顔を横にしながらテーブル
に伏せている子供がいた

顔はローブで見えないが多分体形からして女の子と推測した

寝ているのだろうかこちらに気付いていないみたいだった

「あゝ」

近くによりその子に話しかけた

「……………ん……………おはよう……………いす……………」

目は覚ましたようだが、どうも寝ぼけている

「おはようございます」

「はい……………って！」

眠っていたその子は勢いよく飛び起きて、

「あわわわ！すみません！！随分と到着が遅いので寝てしまいました！」

と、その子は頭を深々と下げ謝ってきた

「別にいいよ。…えっと、君は何故ここに居るの？」

その女の子は驚き、少し怒った表情で答えた

「何故って！私がここの寮長だからですよ！」

数秒の沈黙。そして気づく

どうやら自分もまだ寝ぼけているらしいと。
顔を軽く二回手で叩きもう一度聞き直した

「ごめんね。どうもよく聞こえなかったからもう一度お願いできるかな？」

「ですから、私がここの寮長です！！」

即答だった。

頭の中で今聞いた言葉が何度もループし、そして

「え、こんなちっちゃい子が……」

「う……た、確かにちっちゃいかもですけど、私はちゃんとした大人なんですよ」

数秒肩を崩しいたが再び、ちびっこ寮長先生の方から話し始めた

「まあ、とりあえず自己紹介ですかね」

被っていたローブの帽子部分を後ろに下げ丁寧な口調で挨拶を始めた

「改めまして、ここの寮長件教師の小桜 小町こまちです。これから宜しくですね」

「……………」

「？、どうしました？」

「い、いえ、なんでも」

体型に合わず、とても宜しい挨拶で呆気にとらわれてしまった。とは言えない

「えっと、君は最上 真君さいじょう しんでいいのかな？」

「え、あ、はい。宜しく願います」

慣れた様子で寮長先生は続けた

「分からない事があつたら何でも聞いてくださいね」

「あ、はい。有難う御座います。（見た目は、こんな（幼児体型）でも中身は大人なんだな）」

「今日はもう遅いですし、部屋に案内しますので、休みになってく

ださい」

先にお休みになっていた寮長先生がそう言いながら、てくてくと？の数字が浮かび上がっている扉が在る階段に歩いて行き、真はそれについて行った。

寮内 2階 ?の渡り廊下

扉を開けると長い廊下になっており中央部分位まで来ると真のプレートが貼ってある部屋の前に着いた。

「ここが真君の部屋です。開ける際はカードをここにスラッシュしてください」

と、扉の横にある機器を指しながら言った

「あの、気になってたんですけど、ここのセキュリティってなんでこんなに厳重なんですか？」

「ああ、それは、昔にちよつと事件が起きてからそうなったんですよ。でも、今はこの通りセキュリティがバッチリですから安心してください」

「はあ……」

その事件などには効かない方がいいのか。と思いつつも部屋の鍵を開けた

「それでは、お休みなさい」

最後にそう言い、来た道をゆっくりと戻って行く寮長の姿を見守り部屋に入った

中層階 第8地区 男子学生寮（後書き）

どうも蜜柑です

書き方とか変だったら教えてほしいです。
誤字があつたら教えてほしいです

まだまだ、物語らしい物語が始まってもしませんが、よろしければ
これからも見て下さい。お願いします！

うるさい隣人（前書き）

申し訳ありませんが、紹介から内容まで全て書き換えさせていただきました。

最初の内容と激しく異なっております。それでも構わないという方は大変うれしいです！

最初の内容が良かった人は大変申し訳ありませんでした。

うるさい隣人

寮内 自室 時刻・午前7：00

「おい、隣人。起きてつか？」

早朝

普段はすでに起きて準備をしている時間だが、昨日は遅くに到着したので寝足りない。そんな状態で朝の7：00なんて時間帯に態々起こしに来てしまった奴がそこにはいた

ガチャ

「……………」

「お、はよッす！隣人！」

片や機嫌が悪い顔をし片や清々しいほどの笑顔。正に正反対の文字が当てはまる図だった。

「……………なに？何か用？」

「一緒に登校しようぜ」

「……………はア？」

初対面の相手に『開口一番』ではないが、それに近しい物言いで話しかけてきた。

どうやら話の順序つてものが分からないらしい。

「……………」

「どうした？黙っちゃって？」

と、不思議そうに相手が尋ねてきた。

ここで、（一緒に登校することを）なんで？と問いかけ訳を聞きだすのが良いのだが、真はそこまで優しくはない。と言うよりただ睡眠を邪魔されて機嫌が悪いだけなのだ。そんな時は『黙っておく』が真にとつての正解だ

「ああ！行き成りこんなこと言ったらそりゃ可笑しいかゝ！悪い悪い！」

苦笑いを浮かべながら謝り、訳を話し始めた

「ついさつき、寮長先生に隣の人を学校まで案内してくれって、頼まれた訳よ、てなことで行こうぜ。早くしないと遅れるぜ」

と、携帯を開き時間を見せてきた。時刻は7：07を示していた

「まだ、7時ちょい過ぎじゃねえか」

「早く行かないと、通勤ラッシュでここら辺一体は酷い事になるんだよ」。俺達以外はもう行ってるぜ」

軽い眩暈が襲った

寝ぼけて聞き間違えたと思いたいが、どうやら本当のようで辺りは不気味なほどに静かだった。どうやら他の連中がもういないってことは本当のようだ

「俺玄関で待つてから早く来いよ！」

と、言い残しすぐさま走り去っていった
真は一人佇み呟いた

「…不幸だ」

中層階 第八地区1stステーション 電車内 午前7:20

「はあ…はあ…はあ…」

「ふいゝ。ま、間に合ったな」

朝食も取れぬまま、寮から全力疾走で約10分
ギリギリ間に合い電車内に居る

「それにしても…、隣人は以外に足早いんだな」

「ん？ああ、まあな。運動神経はそれなりにある方だと思う」

「そうなのか？じゃあ隣人、今度俺と勝負してみつか？！」

「何でそうなるんだよ！てか、さっきから気になってたんだけどよ、その隣人って何だ」

「ああ、スマンスマン！お前の名前を寮長先生から聞くの忘れてな」

まあ、大体そんな事とは思っていた

大方、寮長先生から頼まれて、部屋番だけを聞いて直に來たのだらう。

「まあ、いいよ。俺もお前の名前知らないし」

「そう言えばそうだな。そんじゃ！自己紹介と行くか！」

「後でな」

「ええーなんでだよ！早い方が良いだろうがよー」

「まアそうなんだが……」

実際の処手っ取り早く済ませたいのだが、羞恥心は誰にだってある
首を横に向け、周りを見ると言わんばかりの顔をして言った

「車内では静かにな…」

隣に居る無駄にテンションが高い奴の所為で数人の乗客の視線が全てこちらに向けられていた

中層階 第2地区エリア13：学びの都市 1stステーション

午前7：50

ほぼ学生しか降りないこの中層階エリアは学生の町だ
数多くの学園が在り、レインボー・ライフ・シティの全ての学生がここに集う事になっている

「いやゝ、恥ずかしかったー」

「こっちのセリフだったの！」

「そんな力リ力リすんなよ」

「誰の所為だ誰の！」

「まあまあ、とりあえずは自己紹介だろ。歩きながらにしようぜ」

「あ、ああ……まあそうだな」

転校先の学校行きの空中歩道に乗り

真から話し始めた

「俺は最上……、最上^{みぎやま} 真だ。真^{まこと}でいい」

「うん、うん。真な、真、真……OKOK宜しくな」

頷きながら名前を何度か繰り返しながらそう言った

「今度は俺か。俺は御堂^{みどう} 要^{かなめ}ってんだ。要で良いぜ」
「御堂か、珍しい苗字だな」

「別に珍しくねえし、それとお前が言うなー！」

騒がしい奴だが、人当たりが良さそうな雰囲気やつだ。何だかんだで案内もしてくれてるし、仲良くやっていけそうだ

「まあ、何はともあれ宜しくな、真」

「ああ、こちらこそ宜しく」

うるさい隣人（後書き）

終わり方微妙過ぎですね。すみません

基本的に主人公視点です。

誤字がありましたら教えて下さると大変うれしいです
書き方を少し変更しました。見づらかったらすみませ。

タイトル変更を考えております。

決まり次第活動報告で知らせたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1880y/>

デスティニー・ライフ

2011年11月27日21時10分発行